

周辺で行われる春の催し物

- 4月3日まで
「久美浜雛祭」豪商稲葉本家で。(如意寺から車で2分の町なか)当施設は、「ぼた餅」が美味しくて有名。水曜休館
- 5月3日(水・祝)
「かぶと山公園祭」如意寺対岸のかぶと山公園(車で5分)
- 6月23日(金)
(株)紫野和久傳 安野光雅美術館・和久傳レストランのオープンセレモニー ※午後から入館できる予定です。
於 同社久美浜工房(京丹後市久美浜町谷 車で10分)
- 6月24日(土)～25日(日)
坂東玉三郎舞踊公演
前売り入場券の販売は4月3日より、下記会館へ直接お問い合わせ下さい。
於 京都府丹後文化会館 TEL:0772-62-5201
京丹後市峰山町(車で25分)

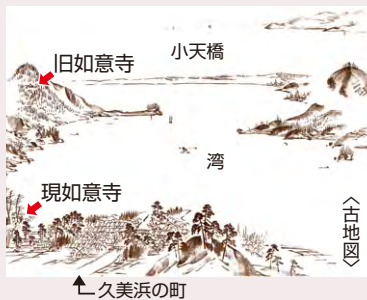
如意寺の歴史⑥

(前回、時代が飛びましたので、少し戻ります。)

如意寺のある久美浜は、平安時代以降、後白河法皇の荘園(久美庄)でした。鎌倉時代、丹後は鳥羽天皇皇后の知行地を経て平重盛の子息が丹後国守となりました。久美浜地域は、「国の奉行」と呼ばれた守護職伊賀氏が支配しました。このような中で、如意寺と伏見天皇の関わりも生じたと推測されます(前回記載)。室町時代になると丹後に内乱が起こり、丹後守護代の一色氏は、小倉・石川・伊賀(久美浜)の三氏に丹後を治めさせます。『丹後御檀家帳』(1538～1540:室町時代)には「くみのはま家五百軒、くみのどいはま家六十軒、くみのみなと家五百軒…」とあり、久美浜湾周囲一帯には大集落が多く存在しました。久美浜の町や湾が見渡せる近くの観音山中腹にあった旧如意寺についても「くみのにょいじ家二十軒」とあり、山中の寺の周囲に集落があったことがわかります。

旧境内をよく知る私(住職)は、十数年前、西国三十三カ所霊場の松尾寺(東舞鶴)を訪れた際、寺院を取り巻く風景が余りによく似ていたため、驚くと同時に言葉にならない懐かしさを感じました。成相寺もよく似ています。

(現如意寺は50年前に、約2km離れた観音山から現在の飛び地境内地に遷社しています。古地図の → が旧境内地)



お参りの作法

- ◆ ろうそく(一本)・線香(三本:仏・法・僧のため)が普通です。
- ◆ 柏手は打たずに、合掌して心静かに祈りをします。
- ◆ すでに取り付けてある四色の色布の鈴の緒は結びません。鈴の緒を結んで奉納したい方は、ご自分で氏名や願意を書いた「サラシ」を持参し、鈴の緒に結びます。



日切不動尊大祭(四月一日・土)にお参りください!

毎年四月一日、恒例の日切不動尊大祭が行われます。柴灯大護摩供は、七名の真言僧侶により午前十時過ぎから始まります。如意寺境内地から伐り出された檜材の護摩壇による神聖な護摩の炎が、善男善女の皆さまの願いごとを仏に届けます。

日切不動尊は、平安時代、久美浜町山岳地帯で空海によって見出された「天長瀧」の分祀であるとの説がありますが詳細は不明で、ずっと昔からこの地で信仰を集めてきました。

午後は、花説法(法話)やもちまきが行われます。終日、ゆつくりとご参拝下さい。

願意：家内安全・息災健康・心願成就・商売繁昌・合格祈願・良縁吉祥・他

授与品：お札・お供物(紅白のお餅)・うどん券を授与します。

折願料：一件 二千元(護摩木に氏名や願意を書いていただきます。)

***四季の花**：境内に、各種山野草が咲き始めます。みつばつつじもちらほら咲く頃です。

◆遠方の方、当日参拝できない方は、お札をお送りします。ご連絡ください。

新パンフができました。HPでもご覧になれます。

春～初夏の花暦

4月 上旬	紅アセビ	イカリ草
上旬～中旬	みつばつつじ	ニリンソウ
下旬	一人静	山芍薬
5月	雪餅草	九輪草
	沙羅	ササユリ
6月	匂いロウバイ	アジサイ
		オカトラオ
		山法師
		石楠花
		白糸草

ご家族のスマホでご覧ください。

4月の動画

如意寺本尊会の「千日会」(花火・灯籠流し・大文字焼き・護摩祈願など)は、毎年8月9日です。

お任せの気持ちになりたい ～自力/他力とお陰の力～

仕事をする場合、趣味で何かをやる場合、毎日の家事や片付け仕事……。

私たちは毎日いろいろなことをやっています。満足のいく結果が出ることも、うまくいわずにイライラすることもあります。うまくいかなかったときは、「努力が足りなかったなあ」とか、「時期が悪かったなあ」と思ったり、または何かのせいにしたりすることもあります。

何でも最初は自分の努力から始まり、だんだんうまくいくようになります。

そして、よく考えてみると、いろいろな人のお陰でうまくいっていることがだんだんとわかってきます。自分の努力と周りで助けてくれる有形無形の力のお陰で今があることに気づきます。「自力や努力」の段階は、迷いの最中であり、気づくとあらゆることながら、自然にやってきて動いているように感じてくる。これが「他力」の領域です。

毎日の食事でも、まずは食材を買ってきて料理して口に入れて噛んで飲み込む。ここまでは自力です。しかし、一旦飲み込んだらあとは胃袋が勝手に消化して栄養を体全体に送り届けてくれます。人間の身体も「自力と他力」で養われています。この「他力」は「仏さまの力」だとも言えます。もはや、私たちの力を超えた大きな何かを守っていてくださるとしか言いようがありません。

ビジネスの世界、深い技術を要する専門職、介護の現場で困難な仕事をしている人も、同じでありましょう。「他力」にいくまでは、悩みながら繰り返す辛い「自力」の時間が必要です。この困難な時間をどのように切り抜けるかが、また大きな問題でもあります。

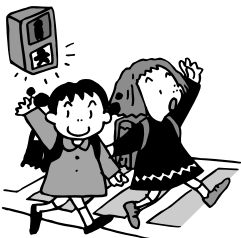
しかし、あるところまで到達したら、人に任せる。あるいは、人様の協力や支援に感謝して、ともに仲良くやっていくことが大切になります。

ところで、「お陰さま」と言いますが、「陰」は“暗くてよく見えない所”です。「お地藏さま」なら丁寧に言うのはわかりますが、なぜ「陰」に“お”と“さま”を付けて敬うのでしょうか。

私たちは、「お陰」を皮相的に単純に考えがちです。仕事でお世話になった人に対して、「あの人のお陰で」と言いますが、その後ろで「あの人」を支えた無限に多くの人々のことまでは思いが至りません。気づかなかった諸々の要因が自分を助けてくれたに違いないのです。自分には見えなかったはずの多くの「陰」に感謝して「お陰さま」と言うのです。

これからは、出会ったすべての人に「おかげさま」、「ありがとう」と言いましょ。

よき言葉、感謝の心、謙虚な気持ちは、すべてまわりまわってあなたを助けてくれるはずです。もし何かがうまくいかなかった場合は、そのように考えてみませんか。



ことは

- ありのままの自分をさらけ出そう。
- まずは、人のことから。
- 自分の不幸、他人の悪口を決して言わない。



仏教の言葉

ぶっ ぼう そう
「**仏・法・僧**」(敬うべき三つのものとしてよく使います。)

仏や法(仏法のこと)が大切なのはわかりますが、なぜ僧が大切なのでしょう。僧とは、「和合衆」(僧・人の集団=サンガ)と言って、“打ち解けたよき仲間”という意味。お互いべったりではなく、料理の“和え物”のように、それぞれが自分の味を出しながら相手の味を引き出していく関係が大切です。ものごとは、「和合」した人間関係の中でしか発芽しません。仏・法のみならず、それを具体化する人間のあり方が大切なのです。高野山には「ブッポウソウ」と鳴く鳥がいます。